作る顔が見える食べ物を
たまご新聞
No. 501
08年01日25日
北茨城市磯原町本田1399 ☎0293-42-2462 http://www.suzuki31.com
すずき養鶏

農業への「見下し」、期待される「懐」、そして現実

先々週、ある人に紹介されたと連絡があり、無農薬の水田稲作について教わりたいと来客がありました。Tさん、48才。オーストラリアで写真事務所を経営し、20年以上も暮らしてきて、現在いわき市の実家に一時帰国しているとのこと。

幸いというべきか、天気予報どおり雨降りだったこともあって、ゆっくり時間がとれたのですが、それにしても気づいてみれば、7時間も話をしたり聞いたりしていました。

なんと、Tさん。オーストリアに水田農業を伝え広めて、世界を救うのだという壮大な志を披瀝してくれました。語らいの中身については、次号以降に紹介したいと思いますが、たまたまの出会いが、水田農業の世界的な価値と、「水」を生かし守ってきた農村社会の営々たる取り組み、そして簡単には引き継げない技術の蓄積といったものを改めて見直す機会ともなりました。

と、そんな今日この頃、転載した2つの新聞記事が目に止まりました。どちらも「朝日」の紙面からです。

かたや、うつ病を克服したという「ひと」欄です。喜ばしい記事として読めばいいのでしょうが、線を引いた「脚本が書けなければ、私の田舎で農業をすればいい」という部分が引っかかってしまいます。

セリフを言ったパートナーさんも、それを記事にした記者さんも、もちろん悪気はないし、それどころか敬意を表していると言うかもしれません。だとしても、あえてツッコミを入れたい。農業を軽視しすぎてるんじゃないのか、と。

農業というのは、いつでも田舎に、まるで空気のように存在しているものなどでは決してありません。水田も農業も経験ゼロだという先のTさんが、米づくりについて説明する私の一言ひとことをメモしていた姿が浮かびます。

もう一つの転載記事は、読者投書欄から。少しでも田んぼをやっている方は、同感と膝を打つ部分も多いのではないでしょうか。まさに農業の現実です。

ひと

うつ病体験を語る人気脚本家

一色 伸幸 さん(47)

うつ病と診断されたのは31歳の時。数年間、「死にたい」という思いにとらわれていた。駅のホームでは電車を眺めながら、線路に飛び込みたい衝動に耐えた。

大学中退後、21歳で脚本家デビュー。劇団の座付き作家にと誘われ、「彼女が水着になれば」などのヒットを生んだ。

劇団が解散し、仕事も減った。不安をかき消すため、かき集めた仕事を全部引き受けた。脚本家の妻にも「寝ればみんな生きている」は、劇団員行きの車窓アジアで買い込んだ睡眠導入剤を飲んで寝た。

2度目の日本アカデミー賞優秀脚本賞。妻と2人の子に恵まれた。なのに憂うつだった。おいしいはずの料理も、美しいはずの出来事も、「膜にラップが巻かれている」ようで、実感できない。家族に病院に連れて行かれ、初めて知った。うつ病という病名を。

2年間、仕事を休んで静養に徹した。妻の収入が特別養護老人ホームの介護職員より、妻の収入が特別養護老人ホームの介護職員より、妻の収入が特別養護老人ホームの介護職員より、